

中 島 先 生 追 悼 記

小 島 信 之

中島先生に初めてお会いしたのは、昭和26年の4月、私が宮崎大学から本学へ転任してきた時であつた。まだ第1回卒業生の諸君がようやく第2年次生になつたばかりであつた。新学年が始まつて間もなく、先生は、或る日、須崎の校舎の古ぼけた一室に数名の学生諸君を呼び集めて私に紹介して下さい。その中に、今度先生の歌集を出すことを霊前に誓い、且つ着々と実行してられる愛弟子の井上佳子さんもおられた。

先生は私の大学の先輩であつた。しかし卒業年次はかなり離れていたし、また早くから台湾へ行つておられたので、偶然本学の同僚となるまでは全然御縁がなかつた。

さて、先生と私とのおつきあいはまことに淡々たるものであつた。君子の交り、というより、むしろ、単なる同僚の誼みの域を出でないものであつた。しかし先生が後輩の私にどんなに暖い庇護の慈眼を常変らず寄せて下さつていたかは、私の肝に銘じて感謝しているところである。

突然の御死去であつた。御持病の方は一昨々年の1年間の入院で非常に快方に向われていて、逝去の直前に精密検査を受けられた結果も上乘であつたと聞いている。もう一つ喘息の気味があり、それがこんなにも急に生命取りになろうとは私どもの全く思い掛けない所であつた。しかし箱崎松原のバス停留場から拙宅まで約1軒の道を歩いて来られるのに、途中で1度はどうしても立ち止つて休まなければならないと言われていたのをみると、その喘息も決して軽いものではなかつたと思われる。現に、昨年4月の開学記念日の式の後で、学生諸君がわれわれ教師といつしよに香椎花園へ散歩に行こうと誘つたことがあつたが、先生は家に帰つて休みたと言われたのに、私はうかつにも先の事を失念してしまつていて、同行を強請したことであつた。途中先生はじつと立止り、荒々しい息づかいに暫く堪えておられた。私ははつとして容易ならぬものに直面した思いであつた。思えば健康な者は病者に対して多かれ少かれ酷薄に振舞うものである。

3ヶ月ほど前のこと、或る方から次のようなお話を伺つて愕然としたことであつた。即ち、その方の知人である中島先生掛りつけのお医者さんが、去年の始頃、先生のことを「今以上に無理をすると必ず早死になさる」といつておられたのだそうである。それ以上詳しくはお聞きしなかつたので、果して中島先生御自身がそのことを承知しておられたのかどうかは審かでない。しかし私には先生もまた充分御納得の上の事だつたと思えてならないのである。その1つの例証として、次のような事実に思い当るからである。

それは昨年4月の或る夕方、本学前の停留場で先生といつしよにバスを待つていたときであつた。話しの前後は忘れたが、

「今度こそは死を賭してやつている」

という先生の一句を確かに聞いたのであつた。しかしそれは余りにも静かな、さり気ない

口調であつたので、私には冗談とさえ感じられたのであつた。またそうとしか思えない程、当時の先生は未だ嘗てない程の潑刺たる健康体に見えていたのであつた。

私が先生の歌に初めて接したのは皮肉にも先生歿後のことであつた。それは、先生の歌集編纂の難事業を進んで引受けて下さつた松田さんを通じてであつたが、その折、最初に接した一首から受けた印象は真に驚異であつた。

一閃のいなづま海の上をわたり風鈴の中の遠き雷鳴

誠に見事なものである。私は、これと似たような歌が齊藤茂吉にあつたように思い、探してみたら、「あらたま」の中の次の一首であつた。

眼の前の電燈の球を見つめたり球ふるひつつ地震ゆりかへる

雷と地震の相違こそあれ、状況はよく似ている。だが、歌の調べはまるで違う。茂吉のは力強く荒々しい。それに較べて先生の一首の何んと繊細でたおやかであることか。さしづめ万葉と古今の対照である。しかしその余韻の絶え入らんばかりの得も云えぬ美しさは、むしろ、茂吉の比較的浅い力み返つたそこばく的美を圧倒し去る程の深さと拡がりを感じている、と私には思える。

また、この歌には精神の非常な高みがある。猛き雷神も、この精神によつて小さい風鈴の中へ封じ込まれてしまつている。そこには爽かな諧謔があり、荒々しい斗争の俗世間を超越した魂の静謐がある。

またそこには先生が私淑されていた英詩人ウィリアム・ブレイクの、

To see a World in a grain of sand,
And a Heaven in a wild flower,
Hold Infinity in the palm of your hand,
And Eternity in an hour.

(一顆の砂にも一世界を、
一輪の^{やぐわ}野花にも一天界を^み観、
汝が^{たなごころ}手心にも無限を
また一刹那にも永劫を握る。

——寿岳文章訳)

の一句の、^{コレスポネンス} 照 応 の精神に共通するものがある。先生最後の論稿となつた「Shakespeare の Sonnets における Metaphors の明暗」(「文芸と思想」第19号、1960年、所載)にも同様の思想が述べられてあつたことを思い合さずにはいられない。

更に私がこの一首に、既に現世が彼岸と化した、芥川竜之介の所謂「末期の眼」が、竜之介の混濁を遙かに超えて、水晶のように透明に輝いている、とみるのは思い過しであろうか。少くともこの一首は先生最晩年の作の1つであり、歌誌「姫由里」の昨年の7月号

に、また、「年刊歌集」の1960年版に出たものであり、私には、既に死の超え難い一線を
超えて私のような俗物とは次元の違う精神の高峯に飛躍し去つておられたであろう時期の
ものであり、先生の死の覚悟の鮮明な内的例証であるとしかわれられないのである。

先生が、かくも素晴らしい歌人であることを御生前露知らなかつたとは痛恨の極みであ
る。良賈は深く蔵す、たまさかの袖振り合う縁しもあだおろそかにすべきではない、とつ
くづく感じ入つたことであつた。先生の詩魂は現在も尚私を^{インスパイア}「鼓吹」して止まず、かつて
少年時代に戯れに歌を作つてこの方長年月絶えて歌作の体験もなかつた私に、不思議にも
歌心が湧いてくるのである。その初心の拙作の幾つかを先ず先生の御霊前に供えたいと思
うのであるが、先生は、「こんなもの歌になつていないよ」と鋭く批評されながらも、し
かしあの人懐っこい微笑を満面に湛えながら、温かく受け入れて下さるでもあろうか。

追 悼 歌 十 首

君逝きて初めて君が大いなる歌人たりしを知れる悲しさ
ひと日だに歌詠まぬ日は無かりしと聞くだに君の詩魂偲ばゆ
今はせめて君が詩魂の後を追ひ君に学ばん五十の手習
君が病ひさほどまでとは思はずつれなかりしを許し給ひね
真実に死を決したる人間の尊き心測り知れずも
人間の外観とその内実のいかに隔たりあるものなりしか
さかしらに言挙げしては愚かしく君が^{たかね}高峯^{まろ}の裾を転びぬ

君の柩アパートの二階より容易には下に降りず、そのうちに野辺送りの
着換えを済まされし未亡人の追ひ付かれしに

アパートの狭き階段降りかねて君の柩は夫人を待ちぬ

君が夫人とふたりのみのアパート生活は五ケ年にて終り、発病されしより逝
去までは僅か五日なりしを

老いらくの密月は哀れ五年にて僅か五日の看取りなりしか

さんぜんと人目もあらず泣き給ふ君の愛妻見るが悲しき

(1961年1月9日)